

# 保育実践力を高めるための実践的アプローチ その2

## ー表現活動における素材の検討ー

斉 藤 葉 子 幼児教育科  
大 木 みどり 幼児教育科

(2013年10月1日受理)

### 〔要 約〕

本研究では、「保育内容研究表現」の授業において使用した「墨汁・紙コップ・ロール紙」による表現活動についての学生の記録から、学生の表現活動に対する意識を探り、また即興表現を引き出すための素材としての可能性について検討した。

1. 表現の素材としての「墨汁・紙コップ・ロール紙」は、遊びや表現活動における様々な展開を引き出す上で重要な働きをしている。
2. 「墨汁・紙コップ・ロール紙」は、学生に「他者と自分自身に対するとらえ方」についての新たな視点与えている。
3. 「墨汁・紙コップ・ロール紙」を素材とした表現活動の体験を通し、環境整備や活動上の配慮等、実際の保育場面を想定した様々なことへの気づきが促された。

### I. はじめに

筆者らは、「保育実践力を高めるための実践的アプローチその1ー授業実践活動における学生の取り組みの実態について」<sup>(註1)</sup>において、「保育内容研究表現」の授業の難易度と学生の表現活動へ取り組みの実態を明らかにした。7割以上の学生が「積極的に参加」と回答している一方、「イメージを広げること」「創造していくこと」「パフォーマンスをすること」「素材との関わり」について難しいと答えている学生が見られた。

それらのことを解決するためには、授業の中核としている「リラクセーション」「コミュニケーション」「即興表現」と共に、イメージを引き出すための「素材の開発」や「活動プロセスの検討」の重要性が示唆された。

特に表現活動において、素材との関わりは、リラックスした状況が作り出されることが自然にイメージや活動が引き出され、即興表現に繋がっていくこと(生まれてくること)、意識しなくても他との関わりが生まれてくること、さらに多様な表現の世界へ展開していくことなど、重要なものと考えられる。

様々な素材に触れることにより、即興的で創造的な表現活動が自然に引き出され、学生はその活動を通し、様々な気づきを促され、新たな自己表現の世界を体験することになるのである。また、自分自身の体験を踏

まえ、これらの素材を幼児の保育活動に生かす上での様々な配慮についても気付いていくことになる。

本研究では、「保育内容研究表現」の授業において使用した「墨汁」と紙コップ、ロール紙による表現活動についての学生の記録から、学生の表現活動に対する意識を探ると共に、即興表現を引き出すための素材としての可能性について検討する。また、表現者でもあり、また保育技術でもあると捉えられる保育者の視点から、乳幼児期の表現活動の捉え方、実践活動における関わり方等についても考察する。

### II. 研究の目的と方法

本研究の目的は以下の内容を明らかにすることである。

1. 「墨汁」を素材とした表現活動における学生の意識
2. 自由な即興表現を引き出す素材としての「墨汁」の可能性
3. 保育実践における学生の気づき
4. 表現活動における素材の重要性

### III. 結果と考察

1. 「保育内容研究表現」の授業実践活動内容について

表1は「保育内容研究表現」の授業で実践した「墨

汁」を素材とした活動内容を表したものである。

| 実践活動内容（授業教室：本学講堂） |  |
|-------------------|--|
| 1<br>回<br>目       | <p>◇「墨汁」を素材とした表現活動</p> <p>◎リラクセーション</p> <p>◎グループ分け（4人の6グループ）</p> <p>◎活動に向けての説明・諸注意</p> <p>◎活動の準備</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講堂にブルーシートを敷き、その上に白いロール紙（約6m）を置き、端をガムテープで止める。（白及びカラーのロール紙の換えも準備する）</li> <li>・グループ毎に準備した、人数分の墨汁・発砲スチロールの容器・紙コップ・ウエットタオルを持っていく。</li> </ul> <p>◎デモンストレーション：教員が、ロール紙に墨汁と紙コップを使って、即興的に表現していく。（各自自由な表現活動）</p> <p>◎グループ毎、各自、自由に墨汁と紙コップによる表現活動を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・墨の濃淡を変えたい学生は、準備したバケツの水を使う。</li> <li>・1枚目に描き切ったグループで、もう1枚ほしいグループは換えのロール紙を持っていく。</li> <li>・他のグループへ移動して描きたい学生は、移動して表現活動を続ける。</li> </ul> <p>◎各グループの作品を見る。</p> <p>◎後片づけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・墨で汚れた所をウエットタオルで拭き、残った墨を集める。</li> <li>・各グループの作品をステージ上に並べ、ブルーシートを片づける。</li> </ul> <p>◎記録用紙に本時の活動内容と、「墨汁」を用いた表現活動について各自感じたこと・考えたこと（楽しかったこと・戸惑ったこと・気付いたこと等）について記録する。</p> |
| 2<br>回<br>目       | <p>◇「墨汁」を素材とした実践活動の振り返り</p> <p>◎リラクセーション</p> <p>◎「墨汁」を素材とした実践活動の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の活動について、グループ毎に記録用紙の記録内容について各自発表すると共に、共通する内容や異なる内容、あるいはグループ毎のテーマを出し合いディスカッションする。</li> <li>・各グループの発表内容についてまとめ、クラス全体で報告する。</li> </ul> <p>◎印象に残った部分をカメラで撮影する</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前回の「墨汁」を素材とした表現活動の全クラスの作品を講堂の床に広げる。</li> <li>・他のグループ・他のクラス作品を全て見て回る。</li> <li>・全作品の中から、自分の印象に残った部分、気に入った部分を2つ、カメラで撮影する。最後にグループメンバーの写真も撮影する。</li> <li>・撮影した物を見る。（場面を切り取ることによって、鮮明に見えてくるもの・現れてくるもの、表現されているものがある。そのことに気付いていく）</li> <li>・作品をステージへ戻す。</li> </ul> <p>◎記録用紙に本時の活動内容と、グループ発表・ディスカッションについて、他のグループクラスの作品を見ての感想・気付き、また、各自が全体の作品の中から切り取った2つの部分について、その理由について記録する。</p>   |

|             |  |
|-------------|--|
| 3<br>回<br>目 | <p>◎リラクセーション</p> <p>◎手遊びの発展遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ分け（5人の5グループ）</li> <li>・自分が知っている手遊びをそれぞれ出し合う。</li> <li>・出された手遊びの中から、グループで手遊びを一つ選ぶ。</li> <li>・その手遊びの歌詞や動き変化させる。</li> <li>・グループ毎、元の手遊びと変化発展した手遊びを発表する。</li> </ul> <p>◎「墨汁」の作品を基にしたコラージュとお話作り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前に全クラスの「墨汁」の作品を4クラス分に分けておく。（クラスに関係なく分けられている）</li> <li>・1クラス分の作品を床に広げる。</li> <li>・各自面白いと思う部分を幾つか切り取ってくる。</li> <li>・コラージュの台紙となるカラーロール紙（3m）を選ぶ。（赤・黒・オレンジ・紺・緑）</li> <li>・台紙の上に各自切り取ってきた場面をグループ毎に貼り付ける。</li> <li>・グループ毎、コラージュした作品を基に、即興でお話を作る。</li> <li>・コラージュした作品をボードに貼り、お話を発表する。</li> <li>・切り取って残った物を片づける。</li> </ul> <p>◎記録用紙に本時の活動内容と、手遊びの変化・発展のさせ方において、また、他のグループの発表を見ての気付きについて記録する。</p> <p>コラージュからのお話作りの活動における感想や気付きについて記録する。</p> |
|-------------|--|

今回の「墨汁」と紙コップを素材とした表現活動は、上記のように3時間の計画で行った。

はじめに「墨汁」での自由な表現活動、さらにその作品を使ったコラージュ、即興でのお話作りへと展開した。本研究では主に1時間目の学生の授業記録を基に、「墨汁」による表現活動についての学生の意識を探る。

## 2. 「墨汁」による実践活動に至るプロセス

この墨汁による表現活動の実践を行うに当たっては、事前の実践活動や演習活動を踏まえ、その素材の特徴としての意外性や楽しさ、自由さ、即興的な自己表現を引き出す素材としての可能性を実感したことが大きく影響している。

### ＜墨汁実践への経過＞

次に表現の授業において、「墨汁」を用いる活動のきっかけとなった事例を示す。

#### 1) 障がい者施設での墨汁を用いた実践

以下の写真は、書家濱崎道子氏による障害者施設でのワークショップの様子である。

濱崎氏が持参した新庄節のオルゴールの音に併せて楽しく動きながら書き始め、作業所の園生が自分から手伝いを希望して墨汁のバケツを持って書家のサポートをしている。



【書家濱崎道子氏による障害者施設でのワークショップ風景 1, 2】

参加者がそれぞれの思いで継ぎ合わせた大判用紙に墨汁を浸した筆で自由に描いている様子。描き方に対する一切の説明なく、濱崎氏の描いた後それぞれが好き勝手に描き始め、他の人の作品の上にも書き始めたりして、偶然に出来上がってくる墨汁の世界を楽しんで描いている。



【書家濱崎道子氏による障害者施設でのワークショップ風景 3】

## 2) 本学教員と学生によるオープンキャンパスの空間作り

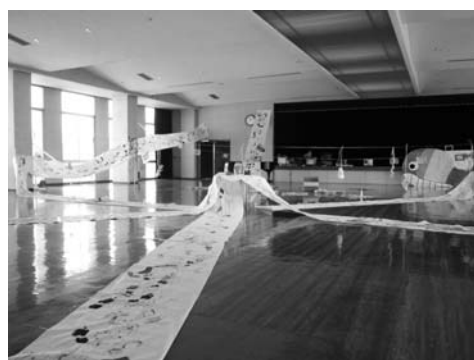
本学の美術担当講師の研究室で、大判用紙に墨汁と絵具等で即興的に描かれたような作品が床に退かれているのを見たときに、次々といろいろな遊びの発展を試みたくなる衝動に駆られた。初めはその作品の上に、紙テープを置いてみたり、研究室から廊下に作品を広げ、紙テープをその上に転がしてみたりと、次々に遊びの展開が浮かんできた。その遊びの衝動を大胆な発想で行動の空間に広げて展示し、遊びの空間を構成してくれた。

様々な素材に触れていく中で、展示する空間を研究室から廊下に移動していったとき、新しい表現の世界

が展開されてくることに気付かされた。そこで、7月のオープンキャンパス時にこの実践の展開を依頼したところ、ロール紙に足跡やほうき、その他のもので自由に描いたものを講堂の空間一杯に床や壁を用い、遊びの空間に変身させてくれた。



【講堂の空間に自由な活動の作品を展示することによって、遊びの空間を作り出すことをねらい、足跡やほうきなどでロール紙に描いていったもの】



【本学教員と学生によるオープンキャンパスの空間作り】



【広い講堂で一人だけ保育してもらっていた幼児が遊びはじめ、2時間以上、夢中になっていろいろ描き始めていたところ】



### 3) 授業担当者による事前の実践

学生に対し授業で実践を行う前に、1、2の実践内容を受け、担当教員が「墨汁」の実践活動を行った。環境設定の検討を含めて、ビニールシートの敷き方やロール紙の長さ、描く用具として、紙コップの他に、スポンジ・ほうき等の用具も使用し検討した。

この事前の実践活動の中で、「墨汁」と紙コップから引き出される表現の世界の自由さと豊かさを体験することができた。また、このような開放感の中で行う表現活動は、より創造的な活動に展開し、思うままに表現することの楽しさを実感させるものであった。

この活動を通し、「墨汁」と紙コップの表現素材としての可能性を再確認することができ、授業実践に臨んだ。

### 3.「墨汁」を素材とした表現活動における学生の意識

「墨汁」を素材とした表現活動について、学生はどの様に感じているのか、どの様な点に戸惑い、どの様なことが楽しく、またどの様な気付きを得ているのかについて、学生の授業記録より考察する。

ここでは、学生の授業記録の記載内容について、多く記載されていた以下の七つの観点から考察する。

- (1) 「墨汁」という素材に対する戸惑いと気付き
- (2) 「自由に表現する」ことへの戸惑いから表現活動へ
- (3) 「墨汁」と「紙コップ」による表現の方法への気付き
- (4) 表現活動の環境・展開への気付き
- (5) 実際の保育実践への気付き
- (6) 表現することへの気付き
- (7) 他者の表現についての気付き

#### (1) 「墨汁」という素材に対する戸惑いと気付き ＜学生の記録＞

- ・最初墨汁での活動を行うと知った時、正直抵抗がありました。墨で服が汚れてしまったらどうしようか、墨はいやだなという気持ちもありました。→実際に行ってみるととても楽しく活動を行うことができた。真っ白な紙に自由に何を描いてもいいという、普段中々できない貴重な体験をすることができました。
- ・私は墨というものを、少中高の習字の時間でしか使ったことはない。丁寧に字を書くということにしか使ったことのない「墨」を使って白い紙に表現しようという言葉に少し戸惑った。→しかし、一度白い紙に描いてみると、色々な墨の表現方法に気がきました。コップを使って丸い形を取って

みたり、墨をぽたぽた垂らしてみたりと面白い仕方があることに気付いて行きました。

- ・墨を使って絵を描く機会がなかったので、何を描いたらいいのか最初は戸惑ってしまいましたが、自由に表現して良いということだったので、自分の好きな絵や心の中を表現して描きました。
- ・はじめは墨を使うということに抵抗を感じた。墨を使うのは書道くらいだったので、遊びに用いることはなかったからだ。また服に着いたらどうしようという戸惑いもあった。→実際に活動に入ってみて、適当に丸やぐちゃぐちゃの線を描いてみることで少しずつ楽しさが分かったように感じた。

「墨汁」と紙コップを用い、大きなロール紙に自由に表現していくという活動において、学生の中には、「墨汁」という素材に対しての戸惑いや抵抗感を持った者も見られた。

「墨汁」は、本来、静かな雰囲気の中で、書道に時間に筆で字を描くものとしての既成概念が強くあることや、服や手が汚れることへの抵抗感も戸惑いの要因と思われる。

さらに、「墨汁」を絵具のように使って、また紙コップで、それも大きな紙に、自由に描く、という表現活動への戸惑いと抵抗感は大きかったものと推察される。

しかし、実際に活動を行ってみると、紙コップで丸を描いたり、墨を垂らしたりという何気ない行為が行われる中で、様々な表現活動が生まれてくることに気付いていく。

また、その活動が次の活動へ繋がっていき、学生それぞれの表現の世界が自然に作りだされてくることに気付き、その活動を楽しんでいる自分自身にも気付いていくのである。

この「墨汁」と紙コップという素材を表現活動に用いた授業を通して、学生が経験してきた「墨汁」や紙コップの既製の使い方への意識を変え、表現の素材として有用であるということを体験的に学ぶ機会となったものと考えられる。

#### (2) 「自由に表現する」ことへの戸惑いから表現活動へ ＜学生の記録＞

- ・真っ白な紙に「自由に描いて表現してみよう」と言われると、最初は何を描こうか考えてしまった。→描き始めてみると、紙コップの側面でスタンプのように○を描くことができたり、今度はそれを何個も続けてぶどうのようにしてみよう等、自由に表現することができて楽しかった。

- ・今までだと、テーマがあって、それを基に絵を描いたり、また上手に、きれいに描かなければならないという既成概念を持っていました。中々自由にという機会を与えてもらうことがなかったので、今回の授業では好きなように、失敗を恐れることなく表現することができ楽しかった。
- ・私達が「自由」を与えられたとしても戸惑いが多くあると思います。だから活動の前に「自由に何でも描いていいよ」と言われて、素早く動く人が少なく、戸惑う人がクラスの中にも見られました。「自由」を本気で楽しむかどうかは「大人」と「子ども」の大きな違いであり、「自由」を楽しむ心は大人になってからも忘れたくないと思います。
- ・「自由に描いてみよう」と言われると「どうしよう、何を描いたらいいのか」と自然に悩んでしまいました。しかし一度書いてみるとなんだか楽しくて夢中になりました。何も考えず思うがままに、無心になって取り組めることがとても楽しかったです。

学生は今まで、表現活動にかかわらず、様々な活動の中で、テーマを与えられたり、上手さや完成度を求められたり、外からの枠と評価・価値観の中で活動を捉えること・実践するという体験が多かったものと考えられる。

「自由に」と言われると、何を描いていいのか、何を描けばいい評価がもらえるのか、教員の期待に応えられるのか、仲間に認めてもらえるのか等の、他からの評価を気にするあまり、自分自身の心の世界をみつめ、表現していくことへの戸惑いや不安があったものと思われる。

表現活動の中で、自由に自分の考えや感情やイメージの世界を表現していくことは、最も保証されるべきものである。

学生はこの実践活動の中で保証された「自由」を、ただ無心に、思うがままに、単純に「墨汁」を垂らすことで、何も考えずに紙コップの底に墨をつけて、スタンプのように丸をつけていくことで、次第に実感していく。そして、描きだされたものが色々なものに見えてきたり、それらをさらに変化させ、展開していくことの体験を通し、自由への戸惑いから心が解放され、自由な自己表現活動を自然のうちにやっているということに気付いていくのである。

### (3)「墨汁」と紙コップによる表現の方法への気付き ＜学生の記録＞

- ・丸い絵を描いてみたり、墨で黒く塗りつぶしたり、墨を垂らしたりと様々な表現の仕方があることを知りました。
- ・墨だと文字を書くイメージがあるが、紙コップを使って行うということだったため、緊張せずに楽しく行うことができた。私は丸い形をスタンプのように付けたが、他の人は紙コップをつぶして文字を書いたり、紙を黒く塗りつぶしている人もいた。同じ道具でも色々な方法があるのだと気付いた。手を墨で汚しながらも楽しく活動することができた。
- ・紙コップを様々な形に変形させて、花びら、花の真ん中の部分等、一つの絵の形が作られているモノがあった。私はずっと紙コップの丸の形を崩さないで使っていたので、とても面白い発想だと思った。
- ・墨は黒という一色だけの暗い色なので絵具などのたくさんのカラフルな色で描くのと違い形や模様や大きさで、目立ったり、目立たなかったりしました。色のある絵具とは違った雰囲気がとてもきれいに感じました。
- ・紙コップで描くのは、いつもの筆や鉛筆で描くのと違い、コップを折り曲げたり、細くすることでより細かいことができ、より自由に絵を描くことができました。
- ・鉛筆やペンとは違い描けば描くほど、墨の色が薄くなったり、にじむことで、味わい深さが出たりする。また筆ではなく描くための道具を紙コップにしたことで、筆とは異なる描き具合を体験することができた。
- ・墨を垂らして、水滴のような模様を作るのが楽しかった。ただ垂らすのではなく、墨を落とす高さや量、強さ等で模様が変わってくるので、そういう細かな変化を見ているだけでも楽しかった。

「墨汁」と紙コップという素材の使い方、その使い方によって異なる表現が生まれてきていることへの気付きも多く見られた。

墨汁の使い方として、墨の濃淡や紙へのにじみ、垂らす高さや力が異なることで描き出されたものが変化してくることに気付いている。また紙コップについては、紙コップの丸い形をそのまま生かしたり、コップを折り曲げたり、細くしたり、様々な形の変形させることにより、多様な形や線で表現することができることについても、実践活動の中で気が付いている。

墨汁を筆ではない、紙コップで描くことへの新鮮さや驚き、それが「墨イコール筆・文字」という学生の意識を変え、自由な表現活動が展開していくことに結びついて行ったものと思われる。この活動のプロセスにおいて、この素材の意外性、多様性、発展性についての気付きも促されていると思われる。

#### (4) 表現活動の環境・展開への気付き

##### ＜学生の記録＞

- ・音楽流してみると気持ちが明るく、高揚し効果的だと思いました。
- ・作品を見ているとただの線をひいたり丸を描いたりぐちゃぐちゃにしたりというものも多くありましたが、何かの物語がそこから生まれてくるように感じました。
- ・活動する環境について、広いスペース（講堂）で、大きな紙に単純な道具（墨と紙コップ）で同じことをする。これは自由に感じる（ための）開放感のある空間構成なのかと思った。
- ・講堂が広いのでのびのびできるのがよいと思う。広い方がリラックスできて環境も良いと思った。」
- ・描いたものすべてを広げてみると、とても大きな絵を見ている気分になった。
- ・みんなの作品を見ていると、ポンポンや、ボワッ等音が出そうなものがたくさんあった。活動している時に音楽や音を聞きながら行ったら、もっと違った表現も生まれてきそうな気がする。是非保育実習でも行ってみたい。表現・個性・発想・自由はとても素晴らしいことだと改めて感じる事ができた授業だった。

保育内容研究表現の授業における実践的な活動は、本学講堂において行っている。授業実践において、学生が表現活動を行うことができる環境を整える、空間を保証することは重要なことと捉えている。その意味で講堂という空間は、学生がリラックスすることができ、開放感を得ることができる場であり、表現活動を行う環境としては適しているものと考えられる。

また、今回の実践活動に音楽を組み入れることや、作品から音や物語を感じたり、講堂に広げられたグループ全体の絵を見て、一つの作品として見えてきたりと、空間との関係において、表現活動がどの様に変化していくのかについての気付きも促されている。

#### (5) 実際の保育実践への気付き

##### ＜学生の記録＞

- ・幼児がもし同じ活動をしたら、もっともっとイメージが広がっていくのではないかと思います。きっと服や顔までも汚して全身で楽しむのではないかと思います。
- ・幼児が書くともものすごい作品ができるのではないかなと思う。感性豊かだし、私より想像力がはるかに上だと思うので。
- ・保育所でこのような活動を実践する時、表現活動にうまく取り組めない子どもも、保育者の動きを例にして、「やってみよう」という気持ちが高まるのだと感じました。
- ・保育園や幼稚園の子どもにつなげてみると、いつも机の上にあるサイズの画用紙にしか描くことができない自分の世界であるが、画用紙の2倍、3倍の大きさの画用紙に、自分の世界の絵を自由に描くことができるということは子どもにとってもとても楽しい活動になるのではないかなと思った。
- ・子どもの表現力、創造力は計り知れないくらい豊かなものがあるので、そのような力を発揮させるには、こういく身近なもので遊ぶことができる活動はとても良いと思いました。大きな紙に多量の液で物を描くというのは、何歳になっても楽しくやれると思うし、楽しさが頭に残っているので、実際に僕もこの授業はとても楽しくすることができました。
- ・もし幼児とこの活動を行うとしたら、黒っぽい服装や体操服など動きやすい服装で行うのが良いと思った。今回は紙コップを使用したけど、手や足などに墨をつけて遊ぶのも楽しいのではないかなと思う。
- ・身近にあるスポンジや割りばしなど、身近にある素材をたくさん用意して、選んで遊ぶのも面白いと思う。汚れた時のための着替えや雑巾なども必要だと思った。
- ・子どもたちと行う場合の活動前の服装や靴等の注意、説明が必要である。
- ・実践する前には、幼児や保護者に事前に連絡、準備等確認してから行う必要がある。
- ・天気や気温を考えて活動することや、後片付けまでが活動などと、幼児に対して実践する等考えておかなければならないことを聞いた。授業で実践したからすぐ実行するのではなく、その時の環境にも配慮しなければならないことに気付いた。跡片付けが大変なので、どのように活動を締めくくするか等、たくさん考えてから実行しなければいけないと思った。たくさん視点を学べる授業だった。



学生はこの「墨汁」と紙コップ用いた表現活動の体験を通し、実際の保育場面を想定した様々なことへの気付きが促されている。

子ども達の表現力や創造力の可能性への気付き、絵具やスポンジ等身近にある素材への気付き、そして最も多く挙げられていたのは、「墨汁」という素材を子ども達が用いる際の環境整備や活動上の配慮である。

保護者への連絡、天候や気温に関する配慮、汚れた時の配慮、後片づけまで含んだ活動への配慮等、実際の保育場面で起こるうることについて想像力を働かせ、子ども達の発達や生活の状況、自然環境、活動のプロセスに配慮した活動の実践等、1年次の実習の経験を踏まえ、また間近に迫った保育実習を想定して、様々な気付きが促されている。

#### (6) 表現することへの気付き

##### ＜学生の記録＞

- ・自分の表現を他人から見てもらい認めてもらうことは生きる楽しみに繋がってくると思う。自分の好きなように自由に表現することは楽しく、生きる活力になってくると思う。
- ・作品を描き終わると心の中がスーッと達成感と満足感でいっぱいになりました。この活動を通して、口だけでなく、描くことで気持ちを表現することが大切だということが分かりました。様々な形でどんどん自分を表現していきたいです。
- ・私は絵が苦手なので、お題等があるとどうしても考え込んでしまう。しかし自由に描いて良いとなると、自由に自分自身を表現することができるので、心が軽くなり楽しかった。絵が得意な人も苦手な人も自由に楽しく表現することができる活動である（実習においても役立つ知識の一つとなりました）
- ・自分の表現を他人から見てもらい認めてもらうことは生きる楽しみに繋がってくると思う。自分の好きなように自由に表現することは楽しく、生きる活力になってくると思う。
- ・何かを書かなくてはならない、何の形はこうである、下手とか上手である、このようなことを一切考えずに活動することが、なぜか気持ちよかった。何のプレッシャーも感じずに活動ができたのが楽しかった。何も考えずに自由に何かをするということは、自然と自分のやりたいようにしているのかなと思う。だから描くことに没頭していたかなと思う。何気なく描かれてある線や点からいろいろなものを連想し、描いていくのが楽しかった。
- ・無心になってできた。表現が苦手な人でもできる。

- ・無心になってできた。表現が苦手な人でもできる。
- ・何を書いたら良いか、上手下手考えずに書くのは気持ちがよい。大きな紙を使うことでドキドキわくわく感が増した。

「墨汁と紙コップ」を使った表現活動の中で、学生は自由な自己表現活動を行うことにより、達成感や満足感、開放感を味わっていることが分かる。

これは、素材の持つ特徴によると共に、空間的・人的環境、及び活動内容の自由度にも関係するものと思われる。

偶然にできた墨汁滴りの跡や、一つの丸、様々な太さや線から始まる活動は、絵の得意・不得意、上手・下手と関係のない、自由な自己表現を引き出しているのである。

また、自己の世界を表現する楽しさ・喜びを実感し、共有していく、このような表現活動の体験は、自己肯定感を高め、生きる楽しさにも繋がっていくものと考えられる。

#### (7) 他者の表現についての気付き

##### ＜学生の記録＞

- ・表現の授業で、墨と紙コップを使って絵を描いたり切り取って物語を作ったり、グループで協力して自分の好きなように自由に好きなものを用いて表現できた。また、他のグループの発表を見て刺激を受け、また個性が感じられて面白かった。
- ・自由に表現することはとても大切なことだと思います。他の人たちの絵を見ても、個人個人の表現が見られました。キャラクターの絵を描いている人もいて、墨を使って何でもできるのだと思いました。
- ・他の人の絵を見てみると、熊の絵をすごく上手に描いている人がいる一方で、ただひたすら丸を描いている人や、コップの淵の部分に墨を付け、ペタペタとスタンプのように白い紙へ押しつけている人など、表現の方法は人それぞれであることに気付いた。
- ・自分の描きたいものを描き切ってしまうと、グループの皆と同じものを描いてみたり、グループの中で一つのを共に描いてみたり、たくさん展開していくことができることが分かった。
- ・1人で描くことも楽しいが、複数で描くことも楽しいと思った。絵に意外な変化が表れて、じゃ自分はこうしようと、発展させる楽しさもあり、偶然の楽しさが感じられた。

- ・友だちと一緒に協力して一つの絵を作ってみたり、遊び方はどんどん広がっていきました。最初自由に表現することに戸惑っていたことを忘れてしまうくらい、楽しく取り組むことができました。
- ・墨を使った表現活動は、自分の気持ちや表情を出せるような場だと感じた。また自分だけでの表現はなく、相手が思っていることを、表現を見て感じることができる。
- ・紙コップを使って自分が思うままに描けたことが楽しかった。自分達のグループだけでなく他のグループに混ざって色々な絵を描けたことも楽しいと思った。
- ・グループの人と言葉をあまり交わさなくても、一緒に活動している実感があつた。
- ・周りの友人と協力して一つの作品を制作し、完成させたときの喜びを味わえることがとてもよかった。
- ・他の人の活動を見てみると自分とまったく違うことに驚いた。同じ道具、同じことをやっているのに表現されたものはそれぞれ異なっていた。

表現活動は自分の感じたこと・考えたこと等、自分の思いを他へ伝えるという意味でコミュニケーションと同じものと捉えることができる。今回の実践活動においては、素材・白いロール紙・講堂という空間を共有しているが、活動においては各自がそれぞれの自分自身の心の世界を表現していくことを大切にしている。したがってグループの中にあっても、何かを目的として描き、完成させることは求められておらず、相談することはない。

しかし、共に同じ空間で活動する中で、隣の人との気配やロール紙に描きだされた互いの世界を見合いながら、無意識のままに影響し合いながら活動が進んでいくことになる。

この活動を通して、自分自身への気付きとともに、他の人の感じたものや表現の仕方・価値観の違いに気付き、他の存在としての仲間にも気付いていく。

また、互いに影響し合いながら活動を進める中で、自然に周りの仲間と協力して一つの作品を完成させたり、物語を作っていたり、絵で尻取りをしたりと発展していく。

この表現活動を通して、外的な指示でさせられるのではなく、表現活動と一緒に行動の中で、自分の世界を自由に表現すると共に、他の人が表現した世界も面白い、認め、尊重し、互いに創造的な活動を楽しむことができたものと思われる。

#### 4. 幼児期の表現活動について

幼児期の表現について、「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」の領域「表現」に示されてもいるように、幼児が自然、人、物等の様々な事象との出会いや関わりを通して、自分の感じたこと、考えたことを、他の幼児や保育者と共有しながら、自由な自己表現をしていくことと捉えることができる。

保育者は、幼児と生活を共にし、子ども達が日々の生活で感じている、あるいは考えている、何気ない、ささやかな表現に心を寄せて、その世界を深く、広く、共に味わい、創り上げていくことが求められる。

同時に、幼児の表現が生まれ、創造の世界が広がってくプロセスを大切にしていくことも求められる。

そのためには、保育者自身の生活体験に裏付けられた感性と、幼児の表現活動、表現意欲を引き出すための関わり、柔軟な環境の設定や素材及び活動のプロセスについての配慮が必要となる。

学生は、今回の「墨汁」と紙コップによる表現活動の実践より、何ら技術の求められない、単純な一つの滴りや丸から自由な表現の世界が展開される体験を通して、幼児の生活に中にある「表現」、表現の原点への気付きが促されているのではないかと考える。

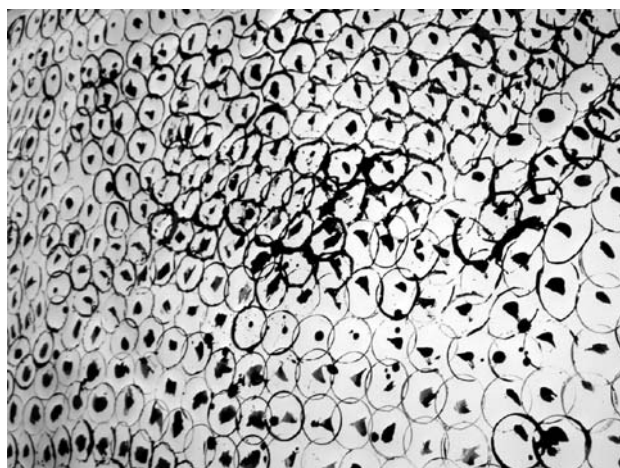
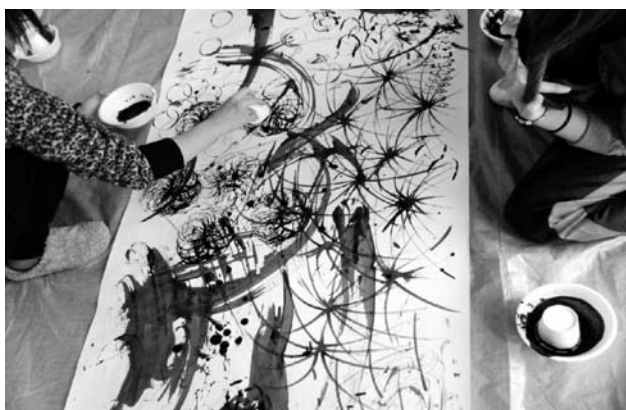
墨汁という素材に対して、また自由に描くことに対しての自分自身の戸惑いに気付くことから、ただ単純に紙コップで円を描いてみるのが、遊びに、表現活動に自然に展開していく体験を通して、素材や描くことに対しての既成概念が取り払われ、自由に表現することの戸惑いから解放され、表現活動遊び・楽しんで自分自身へ気付いていく。また、同じ素材を使って、同じ空間で活動する体験は、無意識のうちに他への気付きや、表現されたものへの共感へと繋がっていくことも実感していく。

さらに、自身の体験を深める中で、保育者としての視点からも活動を見つめ、様々な気付きが促されていくのである。

このような表現活動の体験を重ねることによって、学生は表現することへの意欲、何気ない日常への表現者としての多様な視点、身の回りにある様々な素材への興味や関心、展開の方法を身体化していく。そしてこのことが保育実践力にも繋がっていくのではないかと考える。

そして、このような表現活動を引き出す素材について、私達の身近にある様々なものに目を向け、実践的に検証していくことは、保育現場、養成校を問わず重要なことと考える。





【墨汁による実践活動風景 1～9】



【墨汁による実践活動風景10、11】

#### IV. 総合考察

##### 1. 遊びを引き出す表現活動の素材としての「墨汁」

遊びが生まれるのは、それを受け入れる周りの人々や環境と密接に関係している。

繰り返し同じ遊びをしていて何の発展も変化も見られないような遊びでも、「そこに遊ぶ子どもの心によって作りあげられる世界」の出現に気付かなくてはならない。

さらに、「子どもの心によって創造される世界を共有し、見守る姿勢」<sup>(註2)</sup>が、子どもの創造的な表現活動を引き出すために重要である。

「遊びの現象学」<sup>(註3)</sup>の中で西村清和は、＜遊びはつねに、遊び手にとっての遊びである。＞、＜私という遊び手の活動、つまり遊び行動とは、まずは、「遊動の生成、現出に関わる行動である」と言わなければならない。＞と論じている。

この授業で実践した「墨汁の活動」は、「墨汁をしたたらせたり、あるいは、紙コップを変形させたままロール紙に擦りつけたり、通常意味する「描くという行為」ではない。これはまさに西村が論じている「遊びの生成・現出」に関わる行動である。

さらに西村は前出の「遊びの現象学」<sup>(註4)</sup>の中で＜ハンマー、つまり釘を打つための道具という明確な可能存在すら、それがどうかして遊び手に触れられ、遊びの輪の中にひきいれられた瞬間に、それが本来

持っていた一切の可能性を失って、遊びの際へときははなれ、そこで突然ピストルになったり、ロケットになったりする。＞と述べている。

この実践で取り上げた「墨汁・紙コップ・ロール紙」の活動は、学生にとり、紙コップで描くという、通常の「描く行為」からかけ離れたものである。

だが、「描くためのものではない紙コップ」、「墨汁・床に広がったロール紙」との出会いにより、学生は思いがけず「遊びの輪」の中に引き込まれ、様々な遊びの世界を体験することができている。

この「墨汁・紙コップ・ロール紙」という素材は、このような意味において「遊びの輪に引き入れる素材」として使われることになったと言える。

学生の記録には、次のような意識の変化が伺える。

＜最初は何を描こうか考えてしまった。描き始めてみると、墨を垂らしてみたり、そこからぐちゃぐちゃに伸ばしてみたり、頭で何も考えず表現していくのも楽しかった。＞

また、＜私は丸い形をスタンプのように付けたが、他の人は紙コップをつぶして文字を書いたり、紙を黒く塗りつぶしている人もいた。同じ道具でも色々な方法があるのだと気付いた。＞等、墨汁と紙コップによってもたらされる「遊び心」、「遊ぶ世界の出現」を楽しみ始めている学生の様子が見えてくる。

この実践活動の中で保証された「自由」を次第に実感していく。そして、墨汁によって描き出された様々な世界の出現、それらをさらに変化、展開していく体験を通し、「自由に描くことの戸惑い」から心が解放され、自然体で表現活動を行っているということに気付いていくのである。

このように、講堂という空間における「墨汁・紙コップ・ロール紙」を素材とした活動は、「遊び」を引き出し、自由な表現活動を引き出す上で重要な働きをしていることが伺える。さらにこれまで表現の授業における「音や動きの即興表現」で体験してきた「遊びの輪に引きこまれた瞬間」を、墨汁による作品は、その「生成過程」を学生に認識させる気付きをもたらしていると思われる。

##### 2. 「墨汁の活動」実践を通し他者の世界を感じる

表現活動は自分の感じたこと・考えたこと等、自分の思いを他へ伝えるという意味でコミュニケーションと同じものと捉えることができる。今回の実践活動では、「墨汁・紙コップ・ロール紙」を用い、講堂という共有空間中で、各自がそれぞれの自分自身の心の世界を表現していくことを大切にしている。したがってグループの中にあっても、何かを目的に描き、完成さ



せることは求められておらず、相談することはない。しかし、共に同じ空間で活動する中で、隣の人の気配やロール紙に描き出された互いの世界を見合いながら、無意識のままに影響し合いながら活動が進んでいくことになる。

この活動を通して、自分自身への気付きとともに、他の人の感じたものや表現の仕方・価値観の違いに気付き、他の存在としての仲間にも気付いていく。

また、互いに影響し合いながら活動を進める中で、自然に周りの仲間と協力して一つの作品を完成させたり、物語を作っていたり、絵で尻取りをしたりと発展していく。

この表現活動を通して、外的な指示でさせられるのではなく、表現活動と一緒に行う中で、自分の世界を自由に表現すると共に、他の人が表現した世界も面白い、認め、尊重し、互いに創造的な活動を楽しむことができたものと思われる。

つまり無意識化の行為における他者との表現活動における共存関係を通し、より具体的に視覚的に確認できる「墨汁による活動」は、＜自分とは異質の「他」の世界を認め、それに位置を与えていく＞ことを認識するきっかけになっていると思われる。

### 3. 「墨汁の活動」による保育実践へのアプローチ

子ども達の表現力や創造力の可能性への気付き、絵具やスポンジ等身近にある素材への気付き、そして最も多く挙げられていたのは、「墨汁」という素材を子ども達が用いる際の環境整備や活動上の配慮である。

保護者への連絡、天候や気温に関する配慮、汚れた時の配慮、後片づけまで含んだ活動への配慮等、実際の保育場面で起こるうることについて想像力を働かせ、子ども達の発達や生活の状況、自然環境、活動のプロセスに配慮した活動の実践等、1年次の実習の経験を踏まえ、また間近に迫った保育実習を想定して、様々な気付きが促されている。

この体験を通して、保育や福祉の現場で、それぞれの個性や特徴を受容していくことの重要性に気付いている。

すなわち、自然体に関わるのが保育や福祉の現場において、それぞれの個性や特徴を引き出すきっかけとなっていくことを感じている。

「無心で意味不明なものを描いているとき、幼児の場合はもっと無心になれると思った。」という学生の気付きには、「無構造の心の構えで迎える保育の取り組み姿勢」の大切さや「子どもの世界の受け止め」という保育実践に繋がる気付きを生み出している。つまり、「墨汁の活動」は、学生にとり、これまであまり

意識したことなかった「遊びに引き込まれる瞬間」の体験を生み出し、保育実践において「子どもの世界」をどう受け止めるかについて認識を新たにしていける機会になっている。

子どものあそびにおける行為をそのように受け止めることができれば、子どもが向かおうとしている遊びの世界に触れることができ、子どもが「遊びに引き込まれる瞬間」を傍らで観察することができるのである。

活動記録や活動の写真からは、「墨汁の活動」体験は、学生にとり、自分の体験を通し、「子どもの遊びにおける行為」や「遊びにおける様々な活動の展開」の経過や保育実践への手がかり、さらに保育における幼児との関わりに関する大切な事柄を自分自身で発見するきっかけが伺える。

このように、「墨汁の活動」は、学生に様々な「保育実践のための視点」や、他者と自分自身に対する捉え方について新たな視点を与えていると思われる。

### 4. 保育者養成に問われる表現教育の意義

三善晃は「表現者として育つ」<sup>(註5)</sup>の中で、＜[音楽の授業に「音楽」の枠をはめない。] 音楽の言葉だけで語ることはできません。音楽には、絵画や詩歌はもちろん日本語、算数、社会との間にも仕切りがありません。また逆に、それ等の領域にも音楽は聞こえてくるはずで。縄文土器は縄文人のうたでもあります。＞と述べている。

この視点は「表現」の授業や保育現場での実践を考えると、重要な視点であると考えられる。墨汁の活動について考えてみると、素材として墨汁や紙コップ、ロール紙を用いているが、講堂という広い空間での実践は動きを引き出し、墨汁を垂らす、コップで描く、紙コップをつぶしたたたきつける等、その活動はイメージ・動き・音・言葉の世界でもある。また、香り、手触り等、様々な感覚でとらえられる活動である。

このように、様々な「表現」活動を考えるときに、表現の「場」としての「表現空間」における「素材との出会い」は重要な役割を担っていると考えられる。「墨汁を用いた活動」は、自分の意識や既成概念に気付き新たな取り組みを進める上で有効なアプローチとなっていると考えられる。

心の問題が山積みとなっている現代において、幼児の心の動きを感じ、捉えることのできる保育者を育成することが以前にも増して重要である。「表現」の授業実践の中で、幼児の心の動きを敏感に捉え、多様で柔軟な場を整えていく意識・視点・実践力を身につけていくことが大切である。



## V. まとめ

1. 遊びが生まれるのは、それを受け入れる周りの人々や環境と密接に関係している。

「子どもの心によって創造される世界を共有し、見守る姿勢」が、子どもの創造的な表現活動を引き出すために重要である。

「講堂」という空間における「墨汁・紙コップ・ロール紙」を素材とした活動は、「遊び」を引き出し、自由な表現活動を引き出す上で重要な働きをしている。

さらにこれまで表現の授業における「音や動きの即興表現」で体験した「遊びの輪に引きこまれた瞬間」を、墨汁による作品は、その「生成過程」を学生に認識させる気付きをもたらしていると思われる。

2. 表現活動は、自分の感じたこと・考えたこと等、自分の思いを他者へ伝えるという意味で、コミュニケーションと同質のものと捉えることができる。

この活動を通して、自分自身への気付きとともに、他の人の感じたものや表現の仕方・価値観の違いに気付き、他の存在としての仲間にも気付いている。

3. 「墨汁の活動」は、学生にとり、これまであまり意識したことがなかった。

「遊びに引き込まれる瞬間」の体験を生み出し、保育実践において「子どもの世界」をどう受け止めるかについて認識を新たにしていく機会になっている。

これは、偶発的な「遊び」におけるコミュニケーションの成り立ちや、「遊び」から引き出されてくる意識の顕在化、「遊び」の行為、「即興表現」における「エネルギー放出表現」の気付きを通して、保育実践への手がかりを探ることに繋がっていくと思われる。

4. 様々な「表現」活動を引き出すためには、表現の「場」としての「表現空間」における「素材との出会い」は重要な役割を担っていると考ええる。「墨汁を用

いた活動」は、自分の意識や既成概念に気付いて、「表現活動」の新たな取り組みを進める上で有効なアプローチになっていると考える。

## VI. 今後の課題

様々な実践において、即興的に活動を展開できる実践力を高めるための方法について探っていく。そのためにも、学生自身が、感じ、考え、表現していくための素材の検討や、実践活動のプロセスについて検討していく。

### 註

(註1) 斉藤葉子、大木みどり：「保育実践力を高めるための実践的アプローチその1ー授業実践活動における学生の取り組みの実態についてー」、羽陽学園短期大学紀要 第9巻第3号

(註2) 斉藤葉子著：「表現Ⅱ 音楽的表現」，チャイルド本社，1990，p130

(註3) 西村清和著：「遊びの現象学」，勁草書房，1992，p26，p28

(註4) 西村清和著：「遊びの現象学」，勁草書房，1992，p156

(註5) 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編：「表現者として育つ」

三善晃著：第1章「音楽の表現と教育」，東京大学出版会，1995，p40

### 参考文献

1) 津守真著：「保育の一日とその周辺」，フレーベル館，1991

2) 津守真著：「子ども学のはじまり」，フレーベル館，1991，p107-109

## SUMMARY

Yoko SAITO,  
Midori OOKI:

### A Study on Practical Teaching Ability of Early Childhood Care and Education 2 — A Development of New Material on Performance in Expression Classes —

The purpose of this study is to grasp the development of creative improvisation by using new material in expression classes.

The new materials are SUMI, PAPER CUP, and ROLL PAPER.

We conducted a questionnaire on our sophomore students in expression classes 2013.

The results are as follows.

- 1) Using new materials is useful to develop creative improvisation.
- 2) Using new materials is useful to give a new viewpoint about how to catch for others and oneself.
- 3) Using new materials is focusing environmental improvements and consideration in the activity in the nursery school.

(Uyo Gakuen College)